

学長対談

本学だからこそその 個性・特色を アピールする時代

大久保哲夫 前学長

&

柳沢 保徳 新学長

【巻頭特集対談】奈良教育大学 新世紀へ



大久保学長から柳沢学長にバトンタッチ

― 平成十六年に国立大学法人に移行しますが、この一年で、大きく日本の大学が様変わりすることになります。大久保前学長の在任中に、本学に多くの変化がありました。四年間を振り返って、主な出来事をお話いただけますでしょうか。

大久保 私が学長に就任する十日ほど前に、文部省（現文部科学省）が国立大学学長事務局長会議を開催し、『国立大学の独立行政法人化の検討の方向』を提示しました。在任中の四年間は、本学に過渡期でしたね。国立大学の法人化、国立大学同士の再編・統合、国立教員養成系大学の再編・統合問題という大きな三つの課題について、学内でも法人化プロジェクトなどにより、さまざまな角度から取り組んできました。いよ

平成十五年十月一日より、本学の学長が、大久保学長から柳沢学長にバトンタッチされました。来年迎える、大学新世紀ともいえる国立大学法人化への考へも含め、新旧両学長に本学のあり方について語っていただきました。

いよ来年度から国立大学法人に移行します。また本学の将来構想として、奈良県での国立の総合大学構想を持っていますが、まだ具体的な話は進んでいません。他にも少子化等の問題で教員の需要が減ってきた中で、国立の教員養成大学のあり方も今後の課題になってきています。

― 学外、地域との連携など、大久保先生ご自身の成果として印象の深い事業や出来事はどのようなものですか。

大久保 この四年間で、特に奈良県教育委員会との連携がより深まったことですね。年一回、奈良県教育委員会との懇談会を開催していたのですが、今年の六月には、連携協力に関する協定書に調印をし、もっと緊密で組織的にいろいろな取り組みができるようになりました。これにより、教員養成、教員の研修、あるいは共同の

人材の養成 地域連携事業の推進等によって 地域への貢献を重視

研究などで、連携協力が具体的にすすめられていくというのが、大きな成果ではなかったかと思っております。また、平成十三年の三月に、奈良県における国立、公立、私立大学による奈良県大学連合が発足し、これからの県内における大学教育に、よりいっそうの強い結束と、前進の傾向を示すものだと思っています。奈良県高等学校の校長会や、奈良県経済各団体の幹部の

方と定期的に懇談会をもつなど、地域連携をより強めつつあるというの印象深い成果です。時代の流れともいえる地域や各組織との連携ですが、地元で育てていただく大学・教員というスタンスが、今の奈良教育大学には重要なポイントではないでしょうか。

― 学長をバトンタッチするにあたってはいかがでしたか。

大久保 柳沢先生は、総務担当の副学長として仕事をしていたので、引継ぎもスムーズで、その上、お若いので、目の前の法人化や、再編・統合などの今後の取り組みに精力的に動いていかれると思います。安心してバトンタッチできました。

総務担当副学長としての経験も活かして

柳沢 私はまだまだ若輩で、過去の学長の先輩方とは威厳が違うように思うのですが、これらの大学の状況の変化や、経営というものが入ってくるということから、本学の先生方のご判断で、学長として選んでいただいたのだと思っています。大久保先生のもとで、副学長として積んだ経験を活かして、今後とも責任をもって、私の役目を果たしたい、奈良教育大学のために役に立ちたいと思っています。

― 柳沢学長としてまず何から始められますか
柳沢 中期目標を掲げたのですが、来年の施行

から基本的に六年間をワンスパンとして、法人としてその中で何をやるか、どこまでできるかを考えながら、人を配置したり、予算をつけたりということをするのが法人のあり方のひとつです。その前に当然、本学が何を指すのかについての学内でのコンセンサスがないといけないのですが、本学が、教員養成系単科大学としてできる限りのことをやっていこうと考えています。例えば、教員になりたいという希望をもっている学生たちの質を高めていくというのも、重要なことです。これから、社会的にも教員の需要が少ない中で、本学から質の高い教員を社会に送り出すということが使命のように思います。

― 本学での教育のあり方は変わってきますか。

柳沢 本学の理念として教員養成がメインですが、その中でも、小学校、中学校いづれかを問わず、教養というものがベースになっており、そういったものを大事にしていかなければならないと思います。それが中期目標でも掲げている教養教育を重視するといったことです。また教員養成教育については、「教師教育」という言い方がありますが、教員がライフステージを念頭において、卒業後も教師としての自己改革努力をしていくという概念が入っていますので、大学では実は完結しないという意味になるのです。ですから教師教育の前半部分を本学でやっていくということ、その中に教養を取り込んで重視していくという二つを並べています。教員養成のあり方について、教職員全体、大学の先生方にも共通理解をもっていただこうと思っています。教科専門のみの教育論だけではこれからの教育大学の授業、教育のあり方は済まないし

学校教育に関わる 多様な資質と教育実践力を備えて
初等中等教育教員を養成

思います。つまり教員養成の理念を、先生方がおこなっている教育の中にどう位置づけているのか、どの程度までの共通理解ができているのか、課題かもしれません。今、教員養成教育への導入の部分として、一、二回生の教育課程の改善というプランも検討しています。

― 運営面ではいかがですか。

柳沢 本学は小規模大学ですから、学長の顔が見え、先生方の性格もわかるという良い面があります。ですから先生方にも、それぞれに適した立場で、いろんな委員会を作り、運営のさまざまな活動を進めていただいています。法人化については円滑な移行をしていかないといいですし、運営の仕方や、考え方のものが、今までの国立大学としてやってきたこととはかなりの違いが生じると思いますが、良いものを創るべく努力中です。

大久保 本主に大学組織の中に経営という分野が入ってくるのですから、大変です。システムとともに、その中には予算が絡み、最終的には学長判断で行うのですから、学長の責任は今まで以上に重いものになってきますね。リーダーシップを発揮する側面がこちらで出てくると思います。

リーダーシップ

柳沢 これからの大学運営は、学外者を含む経営協議会や教育研究評議会の審議を経て役員会での運営となり、その責任を法人の長が背負うことになります。さまざまな提案について各専門家が「このほうが良いですよ」と助言していただいたならば、謙虚に耳を傾けるという形が私なりのリーダーシップだと考えています。ただ予算などでは、学長が前に出て行かないといけないのですが・・・。

― 国立大学法人になれば、運営システムは随

分変わりますか。

大久保 変わってきますね。経営協議会という経営について審議をする機関もありますが、最終的には学長判断になります。

奈良教育大学独自のシステムも…

― 国立大学のあり方も変わってきていますが、学長のあり方も、変わるのでしょうか。

大久保 そうですね、世の中も、全般的に速いスピードで変化してきていますから、これからの学長は今までの国立大学の学長としての存在とはまったく違ってくるのかもしれないですね。また、そのような中で、本学では本学独自のシステムや、考えが必要になってくるでしょう。新しいカリキュラムや教材の開発を進め、現職



PROFILE

柳沢 保徳 Yasunori Yanagisawa

昭和23年10月5日生まれ 奈良県出身
昭和42年 奈良県立奈良高等学校卒業
昭和48年 大阪大学大学院基礎工学研究
科修士課程物理学専攻修了
昭和58年 工学博士(大阪大学)を取得

昭和49年 奈良教育大学教育学部助手(応用物理学)に採用され、昭和57年7月、同助教授(理科教育講座応用物理学)に昇任。平成8年8月、同教授(理科教育講座応用物理学物質科学情報)に昇任。平成12年6月に学長補佐、平成13年4月に副学長(総務担当)となる。平成15年10月から学長となる。
取得学位：工学博士(大阪大学)『希土類多硫化物の高圧合成』

教員のために大学院の門戸を広げ、「ならやまオープンセミナー」などの公開講座を増やし、社会との関わりを広げるなど、今まで行ってきた工夫以上に、もともとと大学内および、関係方面との連携が必要になってくるのではないのでしょうか。

― 地域との連携については、さまざまな形で実施されていますが、産学連携についてはいかがでしょうか。

柳沢 教員養成という特色を活かした連携というところ、本学の学生にプラスになり、地域の方にもプラスになるという意味で、奈良県教育委員会でも強く期待されている、学校支援のための学生ボランティアの派遣など、積極的に検討しています。また、文部科学省の進めているサイエンス・パートナーシップ・プログラム(SPP)に基づき、現在特に理科の先生方が取り組んでくださり、地元中学校・高等学校の生徒たちが大学を訪問する機会を作るなどの試みを始めています。また、産学官の連携については、技術の先生方が中心となり、奈良県における産業の再発信事業という形で奈良県に提案しているものがあります。また地域連携において、観光ボランティア研修というものもあります。観光ガイドをボランティアでされているみなさんに、観光とは何なのか、文化の継承といった意味で教育サイドからのアプローチをして、研修会で学んでいただくものです。そういったところに教育大学の特色を活かした産学官連携や地域貢献・連携の意味があると思っています。先ほど大久保先生がおっしゃったように、ならやまオープンセミナーなども、地域との交流や、生涯学習になり、教育系大学の得意とする分野の公開講座を今後も続けて実施していきたいと思っています。

大学院改組

― 大学院の体制も変わっていくのですかね。

大久保 本学の大学院は、昭和五十八年に六専攻で始まり、現在は十一専攻です。比較的規模の小さな本学としては設置発足は早く、内容面においても評価されています。最初の段階から、現職の教員も受け入れ、また夜間開講なども実施しているのですが、実際にはなかなか集まっていけないというのも事実です。大学院二十周年を期に、単なる過去を振り返る二十年ではなく、前向きな二十年ということ、今後の方向について検討いただき、昨年度から具体化に向け準備を進めてきました。早いうちに改組が可能になり、実現が近いという状況になってきています。教育実践開発専攻という、現在の学校教育の課題に直接応えていける新しい専攻を設けていこうということと同時に、今までの学校教育専攻あるいは各教科教育専攻のカリキュラムの充実をさらに図っていくもので、そういう改組への取り組みがいよいよ大詰めになっているという現状です。

附属校との関わりや国際交流

— 附属小学校が改築されていますが、完成はいつですか。

大久保 附属小学校の校舎は昭和三十八年にできあがったものです、構内でも一番古い建物でした。来年春から新校舎使用になるのですが、多目的ホールなどもあり、また、さまざまな形で利用されることが期待しています。

柳沢 学ぶという観点では特に、小学校教育は環境が影響しますので、附属小学校の生徒のみなさんと共に私も新校舎のできあがりを楽しみにしています。また、大学の先生方が附属幼稚園や附属小中学校へ出向くことも多くなり、教



育現場の現状や、こどもたちの生の声を聞く場面が増えました。教育系大学において、教員養成に携わる先生方ですので、教育現場の空気はまた、大学内とは違う新鮮さがあるのでしょうか。

大久保 附属中学校の生徒たちが大学の研究室を訪問したりもしています。附属中学校の先生方も大学の先生方にご指導をいただくなどして、相互の交流が広がってきていますね。大学附属ならではの光景ではないでしょうか。留学生のみなさんが、附属小中学校で、母国の話をするという機会もたくさんありますね。

— 国際交流についてはどのように取り組んでいますか。

柳沢 国際交流への取り組みは、歴史文化都市奈良の土地柄、さまざまな国からさまざまな意志をもって学生たちが学びにやってきました。それぞれ、海外（母国）から見た奈良のイメージがあり、奈良で学びたい、奈良でしか学べないものがあるという理由での留学です。本学でも日本の学生たちに混じり留学生がまじめに学ん

でいますが、もっと奈良の地を活かした国際交流ができないものかと考えています。さまざまな角度から取り組み、積極的に奈良教育大学の特色を活用したいと思っています。

大久保 今の時代はひとつひとつ丁寧に創りあげて、丁寧に使っていくという時代だと思います。最初に述べました三つの課題の中で、国立大学法人化以外はまだ始まったばかりで、これから考えていかなければいけないことばかりです。奈良教育大学は良い教師を育てる場であり、ますので、ひとりひとりの学生を丁寧に育てて、立派な教師が巣立っていくような大学として、良い特色を活かして今後も輝く大学であってほしいと思います。

柳沢 まったく同感です。教員養成の大学として良い特色を活かして、学生たちを大切に育てていきたいと思っています。就職支援につきましても、教員や、企業就職のための手助けを、全学あげて、先生方の共通理解とともに進めています。より充実した奈良教育大学をつくっていききたいと改めて感じています。

— 奈良教育大学の長い歴史と伝統を引き継ぎ、二十一世紀を担う人材の育成はもとより、教育大学の特色を生かした地域への貢献について全学的な取り組みを推進されていることを強く感じました。



地域に開かれ、地域に貢献し地域とともに活力を生み出す大学